特集
手でみる絵本を展示する
— 学生企画：文学部横山ゼミ 手でみて楽しむ絵本展を開催して —

"Le petit chaperon rouge ", デザイン：Warja Lavater, 出版：Les doigts qui rêvent 2008 (左)
"Des vers de travers ", Annette Diesen 作, 出版：Les doigts qui rêvent 2012 (右上)
"はらぺこあおむし : 点字つききわめ絵本 ", エリック・カール作, もりひさし訳, 出版：偕成社 2007 (右下)

CONTENTS

■ 特集：手でみる絵本を展示する
— 学生企画：文学部横山ゼミ 手でみて楽しむ絵本展を開催して — 文学部准教授 横山佐紀
■ 中央大学 Diversity week 2019 推奨書籍の展示に協力して 文学部教授 大田美和
■ CHOISリニューアルのお知らせ
■ 第11回インターナショナル・ウィーク 企画展示「アフリカ探訪」を開催
■ 学部長、オススメの一冊
■ 新収資料紹介 中央大学教職員著作目録・資料目録（2019.4～2019.6収集分）
2019年12月2日（月）から7日（土）にかけて、中央図書館2階展示コーナーにて、「手でみて楽しむ絵本」展が開催されました。中央大学には日本、およびフランスで出版された個性豊かな「さわる絵本」が20冊ほど所蔵されています。本展はこれらの資料を紹介することを目的に、「総合教養演習（1）」（横山ゼミ）の授業の一環として4名の文学部3年生によって企画され、中央図書館の全面的な協力のもと実現しました。

文学部本年度から開講された「総合教養演習」は、13単位を超えた領域横断的な演習です。横山ゼミは「ミュージアムと社会」をテーマとし、収集、展示という行為に含まれる問題を読み解き、ミュージアムという存在を批判的に考えることを目指していいます。ミュージアム研究には、歴史学、美術史学、教育学、政治学などさまざまな分野がかかわるので、専攻の異なる学生が一緒に勉強するにはうってつけです。

前期は共通のテキスト（川口幸也編『展示の政治学』水声社、2009年）の講読を中心に進め、後期は展示を作ることを大きな課題としました。ミュージアムにとっては、実は企画展よりも常設展が重要です。というのは、どのようなモノを集めるかというのはその館の方針やアイデンティティと深く関わっているからです。そこで、私たちの展示も中央大学が所蔵する資料を紹介することを目的に定め、他大学にはおそらく所蔵がなく、かつ中央大学が所蔵していることが学内でもあまり知られていない「さわる絵本」を取り上げることにしました。さわる絵本を展示することにしたのは、資料の紹介に加えて、ミュージアムが五感の中でも視覚が優位となる空間であり、視覚に沿らかの問題を抱える人には排除の空間となってしまうという点を考慮してのことでもあります。多様な素材が使われ、カラフルで手ざわりもいろんなさわれる絵本は、見える人も見えない人も一緒に楽しむことができます。展示の準備として、視覚障害者とミュージアムのアクセスビリティについての文献を講読したうえで、日本語と英語の両言語で「ふるえる博物館」を職員の方に解説していただきながら見学し、日本語図書館ではさわる絵本のコレクションについて館長に説明をしていただきました。

展示企画にあたり教員が指定したのは、「所蔵資料およびさわる絵本を取り上げること」であることだけです。展示会タイトルと展示会コンセプトの検討、出品資料の選択、展示動線の決定、作品解説執筆など、展示会を実施するために必要なすべての作業は、4名の話し合いによって進められました。具体的な作業分担は、チラシデザイン担当が福田奈々加さん（フランス語文学文化専攻）、プレゼンリース担当が矢吹莉音さん（社会学専攻）、キャプション担当が本村将之さん（日本史学専攻）、展示レイアウト担当が稲川和樹さん（社会学専攻）です。出品資料の解説も、4名の学生が分担して書きました。

視覚障害というトピックに配慮して、キャプションや作品リストにUDフォント（ユニバーサル・デザ
イン対応のフォント）を使うことを決めたのも学生です。展示作業や撤収は、全員で行いました。

展示には、日本で出版された資料5点、フランスで出版された資料6点が出展されました。さわる絵本ばかりでなく視覚障害や展示に関する所蔵図書から、ヨシタケシンスケさんの「みえるとかみえないとか」（アリス館、2018年）が、展覧会の最初の1点に選ばれたのも学生による工夫のひとつです。「みえるとかみえないとか」のあとには、ページ上に浮き出た線を指さわりながら出口までたどり着く「さわるめいろ」シリーズ、「ぐりとぐら」、「はらぺこあおむし：点字つきさわる絵本」、フランスの出版社による五感で楽しむ絵本（ページに付いている鈴を鳴らすこともできます！）、文字をひとつずつ手ざわりで物語を追う『あかずきんちゃん』などが続き、中央大学が所蔵する貴重で楽しい図書がバランスよく紹介されました。

通常、これらの図書は文学部総合教育科目共同研究室（多摩キャンパス3号館3階）に開架で所蔵されており、だれもが手に取ってみることができます。しかし期中会でセキュリティの問題から、ケース展示とせざるを得ませんでした。そこで、2日から6日までの5日間は、ケースから取り出して来場者が手に取ってみることができる時間も設け、かつ、その時間中に、学生が必要と取り2回10分間のギャラリートークを行うことにしました。来場者に展示の説明をするのは、展示を作った者の責任です。

ギャラリートークについては、出品資料のうちどれに焦点を当てるのか、何をテーマとするのかは各自でまかせることとしました。予定の10分に満たずに早く終わってしまった、かと思われるなどしたかったり一、一方、展示に出ていない資料を用意して情報を補う工夫をしたりと、毎日個性あるトークが行われました。また、来場者が手に取りやすいよう、二日目からは当初のプランを変更し、展示ケースの前に長機を出して資料とキャプションを並べ、そこでトークをするようにしました。トーク開始前には学生が館内アナウンス。学生や教員、図書館職員のみなさんが図書に参加してくださったも、美術館関係者も足を運んでくださり、学生に具体的なアドバイスをいただいたことも大きな刺激となりました。

一方で、反省もあります。それは、実は「なかなか足を止めてもらえない」ということです。広報については、図書館公式ツイッター、ホームページなどへの情報掲載のほか、スターバックスの電子掲示板を使った告知、プレスリリースのエントラッタ上での公開など図書館に全面的に協力していただき、担当教員も文学部ホームページに情報を掲載したり教授会で告知したりチラシを掲出しましたし、その結果、国立国会図書館ポータルサイト「カレントウェアネス」（図書館・図書情報学に関するトピックを紹介するサイト）に取り上げられることのうれしいニュースもありました。しかし、図書館は予め読んだり借りたりする場で「展示が行われる場所」とは認識されていないのか、足を止めてもらうことが難しいのです。学生の積極的な声がけももっと必要だったかもしれません。あるいは、床の色を変えて「ここで何かをやっている」ということが一目でわかるような工夫も必要だったかもしれません。このあたりは、今後の課題ということになるでしょう。
教員・学生も、図書館も、授業と図書館が連携してひとつのプログラムを実施するのは初めての試みでしたが、充分な内容の展示ができたのではないかと思います。重要なことは、中央大学がすでにしているリソースを再発見し、活用してもらうきっかけを学生自身が作ることです。学生たちの自主性、工夫と柔軟に対応に加えて資料のユニークさもあり、このミッションは充分に果たされたと考えています。

最後に、展示ブースに加え展示に必要な細かい道具を諸々用意くださったほか、学生との事前の打ち合わせ、広報から初日の展示作業に至るまで、さまざまなアドバイスとともに全面的にご協力いただき、私たちを温かく見守ってくださった中央図書館の職員のみなさんにお心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

Diversity Week 2019に関連する資料展示を開催
「中央大学 Diversity Week 2019 推奨図書の展示に協力して」 文学部教授 大田美和

2019年12月6日～14日に開催されたCHUOハラスメント防止啓発×Diversity Week 2019に合わせて、中央図書館2階展示コーナーで12月10日から21日まで、「障害／病気」、「ジェンダー／セクシュアリティ／LGBT」、「グローバル／インターセクショナル／ダイバーシティ」の三分野について、教職員が推薦した図書やDVDなど約130点に加え、国際機関資料所蔵の関連資料244点が展示された。

この中には卒業生の著作もあり。新井湖則『光を失って心が見えた：全盲先生のメッセージ』、岩本友規『発達障害の自分の育て方』、神田健馬編『いま、絶望している君たちへ：パラアスリートで起業家。2枚の名刺で働く』、栗原たま子『オネエ産婦人科：あなたがあなたしか生きること』、高井輝明『あなたは顔で差別をしますか：「容貌障害」と経った五十年』など8冊である。

展示期間中は多くの学生や教職員が足を止めて書籍を手に取っていた。私のおすすめは、『女性・スポーツ大事典』、『歴史を変えた50人の女性アスリート』、『よくわかるスポーツとジェンダー』である。映画『福田敬子 女子柔道のバイオア》の上映会では、これらの本を元にして学生たちが上映前トークとワインを実施した。

映画「えんとこの歌 塩たきが歌人・遠藤滋」（2019年度毎日映画コンクール・ドキュメンタリー映画賞受賞作品）の上映会で学生たちが書いたコメントも掲示した。「生き方を考え直させられた。自分の出来ることのまだほんの一部の力しか使えていないのではないか」「人が人に助けられる映画でした」、「お互いがお互いを必要とする関係をみて、介護のイメージが変わりました」、「『かっこ悪いところを見せるなんて』障害者運動の理念だと思うました！」などの感想があった。

2020年4月のガイダンスセンター開設により、中央大学のダイバーシティ推進が本格的に始まる。今後はぜひ、学生の皆さんがこのような展示の企画や運営に積極的に関わって、ともに学び合う大学を作ることを期待している。
学生企画:文学部横山ゼミ

2019年12月2日(月)ー12月7日(土)
中央図書館2階展示コーナー

絵本を手でみるってなんだろう?
手でみて楽しむ絵本展

第11回 インターナショナル・ウィーク
企画展示「アフリカ探訪」を開催

恒例の全学行事「インターナショナル・ウィーク」の開催に伴い、2019年11月18日(月)から28日(木)まで、中央図書館では今年のテーマ「アフリカ～躍動するサハラアフリカの大地」にあわせた企画展示「アフリカ探訪」を行い、経済成長の著しく世界中から注目を集めるアフリカについて、その文化・経済・自然など豊かに伝える資料約25点を展示しました。

4階開架書架室の中央の行脚 없く、「文化」をテーマに、文学・紀行文・伝記・ファッション・民俗学・芸術に関する図書を展示しました。アフリカ各地に分布する世界文化遺産については、大判の写真集を設け、その他資料も詳しく鑑賞できる機会を設けました。また、興味を持った本は自宅でゆっくり読めるよう、展示資料の貸出も行いました。

2階の国際機関資料室では、"Innovation and Technology"と題し、現代のアフリカ経済を象徴する国連資料を展示しました。
学部長、オススメの一冊

学生のみなさんへお薦めしたい図書を一冊選んでいただきました。
中央図書館2階、理工学部図書館、国際情報学部図書館で展示します。
※新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により、各図書館（館）の展示開始は2020年3月現在未定です。決定しましたら図書館HPや図書館案内（案内）案内にてアナウンスいたします。

法学部長　猪股 孝史 教授

『福沢諭吉の「学問のすゝめ」』

橋本治邦　幻冬舎　2016年
配布場所：開架02/F38、閲覧02/F38、TL002/F38

あまりにも著名な福沢諭吉の「学問のすゝめ」であるが、その読み解きかたを指摘するのが本書である。明治期の文章であることもあり、読み解き効果だろうというほど実は容易ではない。当時の時代背景や言葉の意味など、橋本治邦の学び方を随所に持ち上げながら、「学問」をすることの意味を明らかにする。お勧めである。

経済学部長　山崎 朗 教授

『人間の経済』

宇沢弘文　朝潮社　2017年（新潮新書）
配布場所：開架02/F38、新潮新書/713、開架小判33/199、TL新潮新書/713

今から30年以上前、東京大学経済学部の廊下で宇沢先生とすれ違った。穏やかという独特の風貌もあり、不思議なオーラを感じた。宇沢先生は、東京大学、新潟大学を定年後、中央大学経済学部教授になられ、私も今、中央大学で教えている。この本からサステナブルな人間の経済、地球の経済を考えるヒントを得てほしい。

商学部長　渡辺 岳夫 教授

『悲しみの歌』改版

演題作　新潮社　2003年（新潮新書）
配布場所：開架文庫/新潮新書/1-14、開架小判33/138/EB9、TL新潮新書/14

人は弱い、そして時に悲しく、するい。そんな人の世のなかでも、暗い片隅で本当は達つ子かように弱気で生きる人たちがいる。その姿は胸をうち、それでもやはり生きていくと思わせてくれる。「海と毒毒」の続編にあたる。前編に比べて知名度は低いが、それよりむしろ奥が深い。学生時代には是非読んでおいてもらいたい本の一冊である。

理工学部長　桜山 和男 教授

『医者、用水路を拓くーアフガンの大地から世界の虚構に挑むー』

中村哲郎　講談社　2007年
配布場所：開架033.8/282/N37、思想033.8/282/N37、TL033.8/282/N37

医療活動のために赴任したアフガニスタンで、病気を治すより病気の原因となっている不衛生な水問題を解決することが先決と考え、自らが医療を抜き、苦難の末に用水路を拓くまでの実話。「平和とは決して人間同士だけの問題ではなく、自然との向き合い方で深く互いに影響している」という著者（昨年の報じた事件により廃人となった）の言葉が心に響く。
文学部長  字佐美 毅 教授

『ツバキ文具店』
小川直美 著 光文社 2016年
配布場所：開業 913.6/024, 運営 913.6/024, ITIL 913.6/024

皆さんは、心のこもった手書きの手紙、年月が経っても忘れられない手紙を書いた経験がありますか。「あの人はこういう字を書くんだ」「どんな気持ちでこの便箋を書いたのだろう」と心をときめかせたことがありませんか。それは人生においてとても重要な経験です。手書きの手紙を書く人はもう少しですが、この本はそんな手紙の美しさを思い出してくれます。

総合政策学部長  青木 英孝 教授

『データ分析の力 —因果関係に迫る思考法—』
伊藤研究室 著 光文社 2017年（光文社新書）
配布場所：開業 417.5/8, 運営 417.5/8, ITIL 417.5/8

今はビッグデータの時代、ビジネスの世界では、需要予測やマーケティングなどにデータが活用されています。また、証拠に基づく政策立案（Evidence Based Policy Making）と呼ばれるように、政治の効果をデータによって検証されています。本書は、因果関係に焦点を当て、分析の基本的な考え方を無式を使わず分かりやすく解説している良書です。

国際経営学部長  河合 久 教授

『花失せは面白からず 一山川教授の生き方・考え方』
丸山学園　河合川商店 1988年
配布場所：中央図書 331/5, 中川 88, 運営 331/5

世間の不条理を知り始めた学生時代に出逢った一冊である。学問や社会に潜む対立する思想・価値に存在する矛盾に対してどのように合意を出すのか、社会で生きること、人はこの難題から逃れることはできない。この本を20年以上手放せないのは、歳を重ねるほどに城山三郎の解釈に共感できる場面に遭遇するからである。

国際情報学部長  平野 晋 教授

「われはロボット」決定版
アイザック・アシモフ著 小説叢書 岩波書店 2004年（岩波文庫 A82）
配布場所：開業 B33/A82, 運営 B33/A82, ITIL B33/A82

映画「われはロボット」(Twentieth Century Fox 2004年)の原典、収録短編「うそつき」が新たに収録。職場の難関達から個体に悩みを打ち明けられたロボットが、全員に対して嘘（うそ）を吐（つ）かざるを得なくなりと結ばれる。「ロボットは人間を助けてはならない」という「ロボット工学第一原則」が、嘘を吐いた理由。以上に書くとネタバレになるので是非お読み下さい（笑）。

※映画「ロボット」は最終回でメディアラボで公開されます。